



—三里塚空港を粉砕するために—

農民に大義あり



発行

学生会
三里塚事務局

三・二六争の歴史と三・二里塚五日開港を武力阻止せよの経緯	1
三・二里塚三争に二六の歴史	3
農業農民問題としての三・二里塚三争	5
動力車労働組合と三・二里塚三争	6
三・二里塚三争と三・二里塚五日開港阻止決戦は	
我々に何を提起しているか	7
資料一 反対同盟ビラ（全三巻）	9
三・二里塚からの報告（全三巻）	10
同志東山薫と三・二里塚五日開港阻止決戦	11
資料二 鑑定補口と説明書と不起訴処分弾劾のビラ	13
「法を人民の手」へ送るオリエンテーション実行委員会	15
資料三 77.5.13 加瀬勲講演記録	16
資料四 寺内金一「ワビエ」記録	20

☆本書は不屈の闘いの姿を我々に遺して逝った大木よねさん、土に生き闘い続ける反対同盟農民、三・二六開港阻止戦におけるゲリラ闘争と暴徒に与えられる管制塔を描いたものです。

三・二六開港阻止戦

「三・二六の開港阻止の闘いは、三・二里塚と山連合空港反対同盟農民の「農地」をわが要塞十三年の命かけて闘います」の呼びかけでもは「ゲリラ」として知られているように、農民の大義、人民の大義をかけて、全国の労働者の力によって勝利しました。そして、今まさに、空港に最後のとどめをさす時がきたのです。混乱と動搖の極致に陥った日帝福田は、未曾有の弾圧をかけ、「五・二六開港」を怒号しています。しかしながら、三・二里塚農民に、人民に大義があることは、三・二六開港で満天下にあきらかになったではありませんか。

このパンフは、どうして農民に大義があり、人民の闘いであるのか、なぜ我々が闘うのか、あるいは、なぜあれ程に闘えるのか、という疑問に答える一助として考えますが、この事に關してこのパンフレットは十分に整理されたものではありません。しかしながら三・二里塚闘争の歴史、三・二六開港の意義、それ以降の権力の動向、農業、農民問題等々をみる中で、そして我々の活動を点検する中で討論し、共に考え、共に闘っていきたいと考えます。できることから始めよう。今こそ三・二里塚農民、全国の労働人民と団結して三・二里塚空港に最後のとどめを刺さうではありませんか。

三・二六斗争の成果を引き継ぎ、三里塚五日町を勢力阻止せよ

理学部共斗会議

三里塚闘争の学習・討論を行なう

三月二十六日 北総台地をより動いた労働人民の三・二六斗争は、ついに資本家側としてその「国家の威信」をかけた「三・三〇闘争」を断念させた。労働人民の正義・人民の正義を掲げて闘争をもちこたえられた労働人民の闘いは、ついに暴走への勝利の展望を切り開いたのだ。三月二十六日の闘いは、全国の労働人民に勇気を与えた。「自分たちの未来は自分たちが決める。資本家側の勝ちにはさせないぞ」という思想を身をもって示したこの闘いは、出口のない「死闘」にあえぐ政府・資本家側が、すべてのギセイをより一歩人民に押しつけてつづけること、全国の労働人民の怒りをより起すこと、共に、限りない動きを与えている。

この闘いの勝利の報酬は、三・二六にあり、我々は何を望むことができるだろうか。それはまず第一に、大義は三里塚農民にあり、政府・資本家側には一歩の正義もないということである。政府・資本家側は、あくまで権威と暴力のために、農民の生活維持・土地を農民から奪い、空想建設地から強制排除しようとしてきた。東山若尾線のテロをはじめ、ありとあらゆるテロを用いて、農民の生活を脅かすの意図を押しつけて生活破壊をしようとしてきた。このような運動を農民が自力で阻止せんとするのは全く正しく、大義は三里塚農民の側にある。三・二六三里塚農民の十三五日にわたる土地の創出、工場を閉めた格闘闘いの成果としてこの闘いは、現された。「二の十三五日間にかけた百億のいのちと魂は、どんなことがあっても引きつづけるのだ」という農民の魂をなぐさめることができる。三・二六に労働者階級と農民の団結の力を示している。資本家側は、労働者階級を生産したものを全て吸いとり、生活破壊と生活不安を人民に押しつけている。このような闘争にあって、三里塚農民の闘いは、多くの労働者の共闘を呼び起こし、労働者の共同行動が積みあげられてきた。三・二六三里塚農民の闘いは、空想建設地から強制排除した労働者階級をはじめ、全国の労働者が、現地で、各地で、場ごとに参加し、それが大きな力を示した。

新入生諸君へ二の三・二六斗争の中に、私たちは日本の未来を建設する具体的な力を見出すことができるのではないだろうか。我々青年学生のかみえる矛盾も日本の未来を建設する二の三・二六斗争と共に進んでこそ解決してゆけるのではないだろうか。

新入生諸君へ、三里塚斗争の学習・討論を我々と共にくりひろげていこう

三里塚闘争弾圧は、ファシズムへの懸念をいだ

一方、三月二十六日の三・二六を通じて、私たちは権威を強めなければならぬことがある。それは次のような動向である。

① 三里塚斗争弾圧の動向(射撃隊射撃)の特別法成立の設計

(空港・農地周辺での集会・デモの禁止、団結小屋の撤去) ③ 警察法適用等々が公然と議論にのぼり、また軍施設が画策されている。また自民党議員が「自衛隊が、(総理は)射撃せよと命令しろ」(赤田孝二「自衛隊を出動せよ」)中山正徳「てん高に叫んでいい」。

私たちは、三・二六に断念される政治的被害をし、かりつかんでおかねばならない。すなわち、資本のテロリズムを断つファシズムへの移行を準備しているというのである。現在、ファシズムの動きは、全ゆる権威を進行している。政治的には、五五年以来の自民党一党独裁体制の崩壊に際して、資本家側は、自民党の受け皿を準備し、反共「中道」勢力を育成し、(民社・公明が主軸となり、社民連・新自由が二に連動している)。労働運動における同盟・三民主義の産権化運動と一体化した形で、おぼろげに現れている。また経済的には、大規模な「産業復興」や農民救済政策(戦後産業復興に伴う低賃金労働力創出と労働者を軸とした参入体制への農民の動員をはかるものとしてある。)など総じて戦時口説独占資本主義への移行をおお握っている。また、政府見解として「憲法上確保できる」などと、軍備強化の代償をとり、刑事法・刑法・少年法・監獄法などの一連の「改正」によって、人民の抵抗力を弱くつづけるようになっている。

では、なぜ、政府・資本家側は、かくの如く凶暴にファシズムを準備しようとしているのだろうか。資本家側の利益を維持するためには、「戦争こそが安全」というのは断念できない。(新日鉄船山会長)と公然と表明するほど、帝国主義の侵略的権威を進行しているためである。帝国主義、とりわけ米帝は、被抑圧民族の解放、反帝・反植民地の要求の解放と社会主義をめざす闘いに直面せられた。そして、一方、世界大戦力を衰退させた米帝にかりり、新たに世界に覇をとなえようとするソ連帝国主義があり、二の二大帝国主義間の覇権戦争、世界戦争の危機が日増しに教化してきている。この二つのなかから、日本の資本家側は、米ソどちらにいくにしろ、日本のアジアにおける帝国主義的利益(とりわけ「韓台」を確保するため、必死のめがけをこけている。資本家側にとっては、政治・経済・軍事、全ゆる分野での戦争準備、ファシズム化が強制されているのである。また、三里塚斗争への弾圧は、二の三・二六ファシズム攻撃として全人民にかけられてきているものではない。我々自身にかけられてきているものに他ならない。

「マシズム攻撃と仰い、三里塚五月決戦を共に仰おう」

三里塚農民は、すでに「農業をやつて食つていける社会」に人民が主人となる社会の建設を見ずしてヨつてゐる。この社会の生産物をつくり出してゐるのは、労働者・農民・漁民などの勤労人民である。資本家は何もなないで、大あぐらをかいておいて、人民大衆がうしほり取り、その金で権力（官僚・軍閥・警察・裁判所）を維持してゐるにすぎない。だから、資本家側の「暴力」は決して強いものではない。労働者・農民が先頭とした人民が、斗争の中で團結を日々うち固め、敵の裏行に備え、決定的な局面に實力をもつて言えば、必ず勝利をかちとることができると。三月二十六日の戦いでの勝利は二の二を云つてゐる。

三國塚の三月決戦と時を同じくして新潟相模の中原義三守
女川義民の斗い・七尾の火置反乱力三守と・全国の農民
の生存防衛の斗いがまきおこつてゐる。これに响应者層級の
斗いも運動してゐる。また・日本原・福島農民の斗い・全
國の「生産組合」との斗いなどの農民の斗い・創産・首切り
刑事強盗と斗つ中小争が國の斗い・狭山斗争も頂点とする部
落大衆の斗いなど人民の斗いはたゞと聚つてまゐつてゐる。
このやうな人民の斗いの頂点として・三國塚斗いは存在し
ており・「相模の義者か」をめぐる政略の背景には・「フ
ラズムか・人民が主人となる社会か」のせめぎあいがある
まゝにゐるのだ。フアミスト集團・青嶺会・中川義相は・い
みじくも・三國塚斗争は「成田の義者反対の農民運動から革命
に質的に変化してまゐつてゐる」と述べてゐる。まさに・そのよ
うな斗いとして三月相模阻止は斗つたのであり・三月斗争
をうけて・三國塚と三月決戦を創案と力を尽して斗い抜くつてゐる。



農業農民問題としての 三里塚闘争

戦後、革命を期した上からの農地改革により、農民の階級的な斗いは後退し、未組織の零細農が生きた。そして農民運動は米価審議会設置とともに、食糧制度の枠内での農産物価格要求斗争に変わっていった。そしてこの戦後の復興期（資本蓄積期）において、農村は労働者に低賃金で満足させるための安い農産物の安定供給・増産は課せられていた。しかし一九五九年豊後玄制定以後、食糧事情は安定を見せ、日本経済は高度経済成長を達成する中で農工商の不均衡發展は更に著しくなつた。近年以後の減反政策、全国総合開発、新全総、新都市計画法、農地の宅地なみ課税、農地法の改正、また「国際分業論」の立場に立った農産物輸入の問題等、さまざまな資本の合理性に見合つた攻撃はなけられ、そしてこれにともない農業の就業人口も一四五四万（60年）から七九一万（75年）へ激減し、しかも専業構成は、60年一専業三三・七％、オ一種兼業三三・七％、オ二種兼業三二％から、75年には専業二二・四％、オ一種兼業二五・四％、オ二種兼業六二・一％となつており、都市人口の年増加の半分の五十六万は、農村から低廉な労働力として都市へ流入し、都市労働者の底辺層の六割以上を形成してきたのである。つまり農村は、都市の巨層に、臨時工としての低廉な労働力の供給源として、高度経済成長を下から支えていたのである。そのことは、戦後農業を支配してきた中高年農民は、農業をやつていけなくなつた場合、農業以外あまり技術を持たず歴史社会の中で歴史のないために、都市の上不建築工事の日雇いや臨時工等になつてい、たといふことをはっきりと示している。一方、農民運動も米価斗争は一定の米価上昇（生産費補償方式）を要求取るとともに、随情として選挙の取り引き材料となり、後退していった。そのような中に於て、三里塚斗争は新しい地平を切り開く運動として生きたのである。

三里塚とは北総台地に位置している。この台地は千葉の農業生産の50％を誇つており、日本三大畑作地帯のひとつとも言われている。空港建設斗争は始まつた時、三里塚の専業農家は70％であつた。「開拓に入つた一代目は食になるが死ぬ」という瀬戸際で、二代目では

んどは食うだけは食えるようになり、三代目は今の生活だ」といった様に、三代目まで作りあげてきた土地と生活を守つていた。こういった所に権力は何の説明もなく、そして農業を続けられる補償もせず（今の代替地はなくもない）突然、金で解決すればよいとばかりに、空港建設を決めたのであつた。

そしてこれに対して、三里塚農民の不屈の13年の農業死守、空港粉砕の斗いは展開されてきたのである。この斗いはなに全国の農民運動、即ち新生産調整と云う農民、福島県の農民、三全総と云う東氏の農民、侵略に反対し反基地斗争を展開している北富士、日本原の農民の運動を勇気づけてきたことだ。そして、これらの全国の斗う農民の最前線に三里塚は位置しているということ。三里塚の斗いの歴史は、キリと示している。また、三里塚斗争は、今までの資本の論理に見合つた形での農村形成、近代化等による農業をやつていけない、都市の底辺労働者にならざるを得ないといふように、抑圧され続けられた農民に対して新しい未来を切り開く運動でもある。そして、三里塚では共同耕作・有縁農業・産地直売等の新しい農村への模索は続けられている。

つまり、た、農業を守り、真の農業、人の営み）を造り出さんとしている三里塚の農民とともに、三里塚斗争を共に抱いていこうではないか。共に闘はん。



『動力者労組千葉地本の闘い』

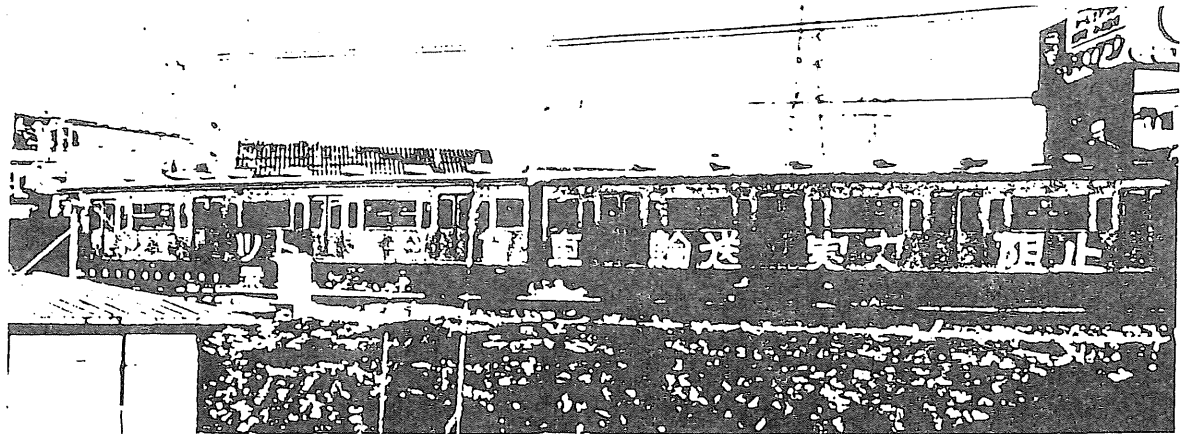
動力千葉地本、千四百一丸となった。三里塚空港燃料貯蔵施設燃料貨車輸送阻止の闘いは、三・三の闘争に阻止の大きな原動力となった。そして労働者の団結を、労働共闘を実践的に全国に示した。動力千葉は「三里塚で闘っている農民を裏切れない」とし、労働者の立場として「三里塚闘争の勝利なくして、我々の未来はない」として、闘い抜き、反対同盟も「動力が首を切られて闘うなら、我々は線路をまくらうにして闘い抜く」として、動力千葉のジェット闘争を全国の労働者とともに支援してきた。この闘いは、不況一掃切り合理化の攻撃、労働者の闘いに對しての暴力的な弾圧、JCI・民間主導型の右翼的な労組の再編の中であって、それと真向から対峙する闘いとしてもあった。そしてそれゆえ、さびしいものでもあったが、労働者が、自ら労働者としての立場から持ち場生産点において闘い抜かれ団結したものであるから強固であり、「連帯を求めて孤立をおそれず」に闘い抜かれた。

昨年三月十日の大集会をはじめ、組織の団結を更にとる闘い、周辺情宣等々と一年間の準備の上で十二月三日・五日の強力な法減産闘争が年末まで続けられ、暴徒隊工事者阻止の闘いは年頭からの順法闘争、拠点スト等により

ジェット燃料貨車輸送阻止を闘う四つの視点

一月二二日の着工粉砕後、植松要塞戦と同時に二月六日からの徹夜の集会デモ、二月七日のストライキと三月一日の備蓄輸送阻止の闘いと、国鉄当局・政府・公団・警察一体と対峙した攻撃、弾圧、マスコットのキャンペーン、全交運や総評闘戦の闘いと食い物にした政治交渉、動力

中心とした三里塚を闘う人民の支持のもとに展開された。そしてこの闘いの前進に手の打ちようのなくなった。国鉄当局はダイヤ改定を放棄せざるをえなくなり、三月二日、ついに全国の枝動隊七千を召集、カス銃をつみ込んで、助役枝動士の登用で（二〇年間もハインドルを握っていない）強行した。その後の備蓄輸送にも絶えず百メートルおきに一人と



いう機動隊の警備のもと一切の今後の展望ももたず、三月二四日まで強行した。このジェット燃料は、三年の暫定輸送ということに決まっているが、パイプラインは、技術的にも無理といわれており、沿線住民の反対運動が、動力千葉の闘いの前進とともに、立ち上がり人としている。周辺住民会議、沿線住民会議。このように全国の労働者が、住民運動が、深さと広さを増し、赤い糸で結ばれんとしている中であって、現地更力闘争とともにもう一方の大きな車輪となって、三里塚空港を「魔港」へ追い込む闘いと闘っている。

動力千葉のジェット闘争は労働者が、誰のために何を作り何と運ぶのかと自ら選びとる闘いとしてあり、三里塚闘争を闘う農民の「農業をやって生きていく社会」として労働者とともに作りんとする時、未来がそこにあり、労働者の団結で、三里塚闘争の勝利「魔港」が克ちとられるのである。

動力千葉の闘いは、耳をもちてそれと示した。我々は彼々の闘いを学ぶとともに、更に「魔港」に追い込む闘いを共に作りながらたゆまず支援していかねばならないと考える。

わたしたち国鉄動力車労働千葉地本は、三里塚空港開港反対、ジェット燃料貨車輸送阻止を、つぎの四つの視点を定めて闘ってきました。

第一に、農民としての生活と権利を守り、軍事空港としての三里塚空港に反対して十二年間も闘いぬいてきた三里塚芝山連合空港反対同盟農民と真に連帯すること。

そのことは、「自分たちの利害以外には闘わなかった」といわれて久しい、現在の日本の労働組合の右翼的流れに抗して、労働組合としての本来の原則をとりもどす闘いでもあります。

第二に、沿線住民、乗客、そしてわれわれ国鉄労働者自身の命を守るために闘うこと。

三里塚空港ジェット燃料貨車輸送計画は、「危険性が高い」ために、政府・空港公団自身が一度は否定したものです。しかし、当初予定したパイプラインの埋設工事が住民の反対に遭い、「開港に間にあわない」から、危険を承知で強行するというのです。こんな無謀な計画を認めるわけにはいきません。

第三に、労働強化、要員事情の悪化を

許さない反合理化の視点です。

政府と国鉄当局は、「国鉄赤字」の大量キャンペーンを通じて不採算部門の切り捨てと経営規模の拡大を、わたしたち国鉄労働者の犠牲のうえにたて、劣悪な労働条件とまったく不十分な要員のまま強行しようとしています。国鉄再建合理化攻撃の一環としてのジェット燃料輸送計画強行を許すことはできません。

第四に、組織破壊Ⅱ第二マル生攻撃粉砕、反弾圧の視点です。

三里塚空港の開港は、福田内閣の政治的威信をかけた支配階級の至上命令です。したがってこれに反対して闘うことは、権力と真向から対決することを意味しており、当然にも国家権力、国鉄当局の集中した弾圧が予想されます。組織破壊を許さず、労働組合としての責務をかけて闘うために、第二マル生攻撃粉砕、弾圧反対の視点を堅持します。

以上、四つの視点に立つわたしたち動力千葉地本の闘いは正義の闘いであると確信します。全国の闘う労働者、農民、漁民、市民、学生の熱い支援・共闘の輪に支えられて、闘います。

三里塚斗争・三月開港阻止決戦は

何を我々に提起しているか

村一人 和正

我々は三里塚斗争を闘うにあたって、三里塚斗争―反対同盟農民の斗い方と生活―を提起している思想的問題を確認しなければならない。

三月開港阻止決戦の勝利は、何よりも反対同盟の農民我々人民の側に正義があり、正義と確信に基いた結合があること、そして権力公団の側には何ら正当性はなく、彼らにあるものは物理力と金による結びつきだけであることによる。ベトナムにおいて解放戦線が、圧倒的物理力とコンピューター戦略をいじめとする「科学力」を駆使した最大帝国主義軍隊―アメリカ軍を打ち破ったように、三月開港阻止決戦で、反対同盟農民と全国の人民は、圧倒的物理力を誇る機動隊を打ち破り、金と力と誇る権力公団と地にたたきつけた。この勝利は、物理的・軍事的勝利として、政治的勝利として、そして思想的勝利としてとらえなければならぬ。「二二二」言う思想とは、××主義とかいう形をとるものではないが、それは斗い方・生活の仕方の中に、萌芽的にではあるにしろ存在している。我々はそれを抱き取り我々の斗いの糧としなければならぬ。

空港反対斗争の中には、様々な空港反対論理が存在している。侵略反革命の基地である、軍事空港である、危険である、公害源である等もそうである。これらの様々な反対論の論理を否定する必要があるであろう。反対斗争への関わりには様々な関わり方があり、それは各個人、各グループ、各党派の置かれていた諸関係・思想的状況によって規定されるものである。先に挙げた様々な反対論のうち、この論と××論を取り出して、○○論は正しいが××論は間違っているといった様な比較をした所で、運動には何程のプラスをもたらさないのである。この斗い同様な面を持っているが、我々は、それを根底的に規定するものを把握し、それを広げていかなければならぬ。運動への入り方は様々なあるが、根底にあるものを把握することで全体性を獲得していかねばならぬ。それは、斗い方・生活の仕方の中にある思想である。そして、様々な反対論はそれを補い、斗いを更に広げる役割を持つべきものである。

三里塚農民は、そして我々は、空港に危険があるから反対するのだろうか。あるいは軍事空港だから反対するのだろうか。公害が出るからだろうか。あり得るかどうかは別にしても、もし立派な民間空港であれば、あるいは三里塚以外ならよいのだろうか。この問題について我々は考え論議しなければならぬ。すなわち「空港は母の心で抱かれないか」、「反対同盟の中で完全に一つにまとまっているとは限らないが、基本的には空港は母の心で抱かれないか」と言えるだろう。反対同盟農民が、「農地死守」の斗いから「農地奪還」へと発展させて、「土に生きる」斗いと空港建設に対峙して、「空港建設よりも、自分達が農業をやって食料を生産することの方が、もっと公共の為にいい」と言いつつ、そこにあるのは空港そのものを拒否し、農業をつぶし農民を殺して空港を必要とする社会を拒否する思想であろう。

それでは、資本家・権力者達は何故三里塚空港を建設しようとしているのだろうか。軍事的目的からか、確かに空港は軍事的性格を有している。しかし、それは三里塚空港に限ったことではなく、およそあらゆる空港は、軍用であれ民間であれ軍事的性格（安全保障下では尚更そうである）を有しているものである。三里塚もその例外ではないといつていいことである。とりわけ三里塚空港は軍事的目的で建設されることになっている。という論議には、私自身としてはあまり賛成できない。確かに資本家・権力者にとって、空軍力の増強は重要課題であろう。しかし、自衛隊西方重点配備から言っても、軍事空港としては三里塚よりも重要で所々あるであろう。彼らにとってこそ第一に、空港自体が必要なのであり、第二に、今度の開発に対する反対運動を封じる意味から、何となく三里塚をやり切る必要があったのではないか。もちろん建設をめぐる利権を絡んでいるだろうが。

空港自体の必要性は何だろうか。空港を必要とする社会とは何だろうか。交通形態は生産力の発展段階、あるいは生産力の在り方に関係あり、又逆に、新たな交通形態はそれに適合する生産力の在り方を誘導する。つまりある交通形態が必要とされるのは、それを必要とする生

産力段階・生産力の在り方があるからなのだ。

帆船と馬車、汽船と汽車、自動車と飛行機、高速道路と高速鉄道とSS丁等、^{一対一の関係ではないにして}それぞれ交通形態は、それぞれある生産力の段階・その在り方に対応している。現在資本主義諸国は、労働力集約型産業から資本集約型産業へ、そして知識集約型産業へと移行することで相対的優位性を獲得せんとしつゝを削っている。(もちろん市場を巡ってもそうであるが) 知識集約型産業とは、コンピュータ・原子力(発電)・航空機等に代表される。情報技術の蓄積力と情報集約伝達のスピード等により、優位性は決定されるものといえるだろう。そしてこの生産力の段階・在り方に対応する交通形態が、高速交通網・高速情報網である。

今ここに日本は、知識集約型への産業構造の移行を計っており、その為に、空港の建設や拡張、高速道路網と高速鉄道網の建設が行われようとしているのだ。

このように空港建設の目的を捉えるとき、我々は、空港を必要とする社会が必要としない社会かという、根本的に遠くへと向うであろう。国際分業論に立脚し、自然と農業を破壊し、農民の犠牲の上に成立する生産力の在り方を拒否するの否が問われているのである。

三里塚の斗いは、ベトナムを始めアジア人民の斗いとならざるやうに、横暴な権力者や資本家に対し、人民は武装し、団結し、実力で斗いつつに、つて権力や資本を打ち破り勝利することを目指すことを、身をもって示している。大義は人民にあり、人の利も地の利も人民の側にある。物理力対物理力の斗いとして我々の斗いにあるのは、権力の頼ることなされるのは物理力と金力であるが、大義に基く人民の結合—人の和、そして地の利・天の時を活かし、あらゆるものを武器と化し、力勢的に斗い敵を追いつめてゆくというところ、三里塚斗争の歴史、三月開港阻止戦は、全国の人民に提起している。

又、三里塚斗争は、「生きること」と「斗いつつに」がそれぞれ別にあるのではなく、生きるためには斗わねばならぬこと、斗いの中で生きるというところが、能動的なものを促されることを提起している。生活と斗争を一体のものとしたとき、人民の力は強固なものとなる。反対同盟農民の中でも、斗いの中で、自分達の生活・生

産(労働)を検討する動きがでてきている。農業・肥料・肥料資材の農業は自分達の首を締めるものであるとして、有機農業をきかけたり、消費者(その多くは労働者である)との新たな関係を作ろうとする産直運動は、工業と農協の間に一日たりとも存在し得ない様子の農業ならぬ脱脚をめざすものとしてあり、ある反対同盟農民の言う「斗いの為に農業をつくりかえる。斗えるうちは農業にする」という言葉にも表われているように、生産と斗いとは一致させるものでもある。そして支援の中にあっても、労働千葉の斗いはこれと同じ質を有している。すなわち、ジェット燃料貨車輸送阻止の斗いの意義の一つは、「何を運ぶかは労働者が決めるものである」という面を持っていたことである。労働の質(内容)と斗いを一つのものとするという斗いは、何を生産するか■いかに生産するかは、労働者・農民が決めるものだから、生産自体を人民が掌握するといふ斗い方である。このように三里塚斗争は、生活と斗いの一致、生産と斗いの一致をめざすものとしてある。

三月開港を阻止する否をかけた三月決戦は、まさに我々に、この三里塚斗争が提起する問題を斗いの中でいかに獲得するかなど、問う斗いであった。三・二六の勝利は言うまでもなく、反対同盟を中心とした斗いとして、横堀野営・四十数ヶ所での更力斗争・強制塔への斗い・第一公園での集会が、連動して斗われ勝ち取られたのである。今後の斗いを考えるとき、どれだけ反対同盟を中心とした斗いを展開できるかが重要となる。そしてそれは、人民の大義は何であるか、三里塚斗争が我々に提起しているものは何であるかを、どれだけ確認し、いけるかにならなければならないのである。

以上若干未整理であるが、不十分な点もあるが、討論のために「白」して提出します。

資料1

これは、三・二六、一万五千もの機動隊を動員した敵権力を根絶させ、空港の心臓部である管制塔と、破壊した。三・二七再度の機動隊を撃退し、三・三〇開港完全勝利した。三・二六、四・二連戦に先立って出された、反対同盟の呼びかけのビラである。十三年にわたる、十一年の中で最もとられてきた十一年の闘争は、この年が現実の勝利であるものである。全人民の前に示したのだ。

いまぞ起て、滅反に苦しむ百姓も 大義を樹てる春はきた

農地こそわが要塞

13年のいのちをかけて戦います

若者男女こころにござりて 悪政を撃つ

三・二六、四・二開港阻止現地連戦闘争

三里塚芝山連合空港反対同盟

「国際空港は、国家的事業とか公共事業だのと、たしかに立派なものであるが、百姓は人間が生活をして生きていくのに一番重要なことを果してきたのでもあり、最も「公共の福祉」に尽しているものであります。昔より、百姓は生かさず殺さずとされたなかで生きてきたのであります。現在に至っても、人間が生きていくために生命の源の食糧を生産する重要な職業である百姓が一番不合理な立場におかれているのであります。その百姓が、今度は、百姓が働く場である農地までも勝手につけられた相場で売らなければ取用法で取りあげられてしまうなんて、あまりにも百姓を愚弄したものであります。」（天神峰・小川嘉吉さんの裁判所への上申書の一部）

十三年も前のこと、新空港建設計画が突然三里塚に決定され、以来、法的にも機能的にも多くの疑問と欠陥が指摘されつつも、もっぱら機動隊の大量投入による強制測量、第一次・第二次の強制代執行、岩山大鉄塔の抜き打ち破壊、故小泉よねさんの畑つぶし、横堀要塞に対する不当な破壊と没収など私ども三里塚芝山農民への権力者の集中的攻撃は幾たびもくりかえされてまいりました。

私どもの土地が空港用地に決定されるに当たってどのような説明がありましたでしょうか。今日まで一度たりとも私どもに政府の話があつたでしょうか。私どもにいかなる罪とがあつて土地を奪われるはめになったのでしょうか。

もし百姓やめてたら、こんな おもしろいことできぬえよ

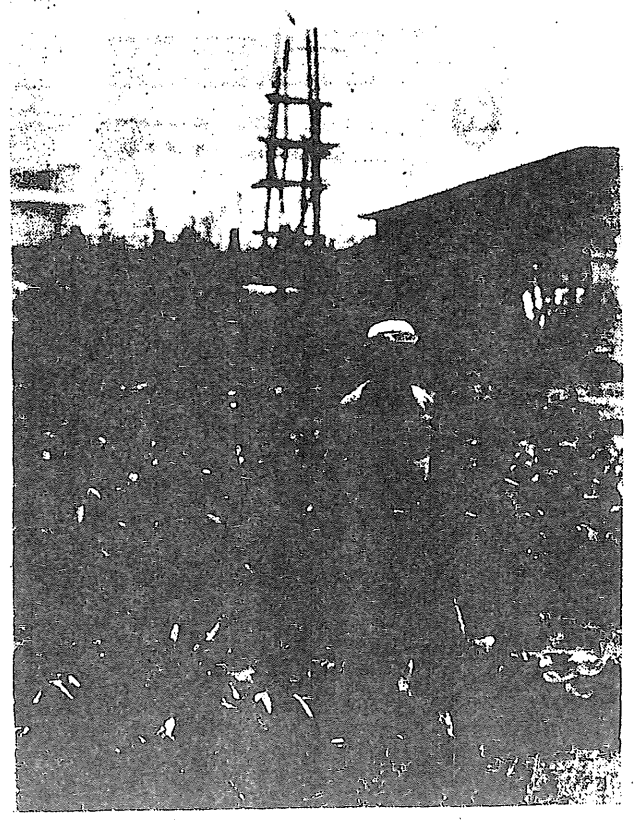
一日に数千名の機動隊の守りがなければ運べない危険なジェット燃料輸送を強行しながら、三月開港という悪政の総仕上げがいよいよ目前に迫つてまいりました。私どもは誤る国策のもと主権と権利を侵され、犠牲にされることを日本農民の名において敢然と拒否するものであります。

東峰部落の梅沢さんは八年前、無断で畑に入り作物を踏みあらし、測量を強行しようとした公団職員に対して、両手に怒りの糞袋をにぎりしめ一時間にわたる抗議の最中に機動隊に逮捕され「暴行」の容疑で起訴されています。

豊かな農業地帯の実現が、コンクリートと危険な航空公害による自然と住民の生活の破壊か、これはたんに私ども地元農民に迫られている重大な選択であるばかりでなく困難な食糧生産問題をかかえている全ての国民の課題でもあるはずで。

農地を強奪し、地元住民に不安を与え新空港建設への疑念が一そう強まるなかで力づくの開港をみすごしするわけにはまいりますまい。

私も一人一人の心に立つ鉄塔がいよいよものをいうときがやってきました。生涯にわたる生甲斐として根かきり聞きます。全国の皆さん。ともに起ち上がり、悪政を撃とうではありませんか。



|| 三里塚からの報告 ||

オノダ ヒロシ

3月26日、空港の心臓部ともいえる管制塔の占拠・破壊によって、三里塚空港の開港は、十数度目の開港延長を余儀なくされた。政府は国内・国外の信用を失い新立法によって反対派への弾圧を強行しようとしているが、それを許さないためにも、そして三里塚空港を廃港にするためにも、現地三里塚の実情をもっと正しく知る必要がある。正しく知ることによってのみ政府が予定している5月開港を阻止することができるだろう。

現地にいった者のほとんどが最初に感じるのは、「想像していたのとは違って、のどかなところだなあ」ということだ。三里塚といえば、機動隊の盾と反対同盟や支援の学生の投石や火炎ボンが日常的に対峙しているというイメージを抱いていた自分にとって、三里塚も京都も日常生活があるという点ではまったく同じだというのは、すごいショックだった。そして援農(集会・デモへの参加でおくれた農作業を手伝いメシをゴチそうになり、時にはフロにも入ってもらって、いろいろな話を聞かせてもらう)に行ってみて、三里塚もやはり日本中どこにもある農村のひとつだという印象を受けた。たとえば嫁さんが最も主な労働力であり、専業農家は少ないところなど……。

このように日本の現在の農業の典型である三里塚は、空港反対という一語も十何年言い続ける中で、除々にではあるが、変わりつつある。有機農業(化学肥料を使わない)、消費者

との結合をめざす産地直売方式など新たな農業の方向が試行されている。そしてそこに全国から、さまざまな場所から自分たちの問題を抱えている労働者・学生・市民が若者から老人にいたるまで、いろいろな人々が集まって、共に闘っているのだ。

現在の運動を批判する人の中からもよく聞かれるのは、「気持ちはいかるがやり方が悪い」とか、「気持ちはいかるが、もうここまでするし、ものだから、反対するのはやめた方が賢い。」という考えだ。まあ最初の意見に対しては、空港予定地の決定に際して地元へ一言の相談もなく、さらに用地の買収を拒否すると、今度は、土地収用法と機動隊の暴力で田畑を奪い取ったという経過を考えてもらいたい。機動隊は法律の名の下に反対派に公然と暴行を加えてくるのだ。反対運動が広く全国の耳目を集めるまでになったのは、十数年間徹底して買収と機動隊の暴力をはねつけてきたからではないか。

二番目の意見に対しては、現在できている滑走路を作るのに六十億円、今から作ろうとしている滑走路には一兆円もの金がかかると言われている。今から滑走路を作ろうとしている土地には、まだ17戸の農家があり、土地の買収さえおこなっていないのだ。たった一本の滑走路しかないし、さまざまな危険をはらむ空港を開港するのと、それに反対するのと、どちらに理があるか。今、反対の意志表示をし、実力行動にふなければ、政府は必ず強権的に開港をなせようとするだろう。政府のなつてなつてで開港を許してはならない。5月開港阻止にむけ、ともに闘おうではないか。

『権力による東山薫氏虐殺 糾弾の闘い』

▼はじめに

昨年、5月6日の鉄塔打ち破壊に続いて、8日東山薫氏が、権力機動隊のかス銃の死傷に虐殺されて以来、すでに一年を迎えんとしている。三里塚芝山連合空港反対同盟農民、東山氏両親、坂志岡田結小屋の仲間たちが中心とな

って、権力に対する階級闘争を煮えたらせ、虐殺糾弾の闘いを繰り広げてきた。政府空港公団は、威信と延命に賭けて、空港を閉鎖にするため、十数年に渡る三里塚農民の闘いとそれに結びついた労働者人民の闘いを向かへるもつづきそうと、虐殺のインパルに腐心してきた。その間、虐殺糾弾報版の闘いは「東山薫同志の遺志を受け継ぎ、空港を粉砕しよう」と、30期港に阻止の闘いの重要な要素となってきた。権力千重地獄、地獄当向は、そこで、3月20日、「30期港」阻止決戦戦いのみ、機動隊の士

気を高め、「権力に立ちむかう者は、殺しても構はない」と激励すべく、虐殺した権力機動隊を不起訴処分決定した。それは、千葉大木村教授の解剖鑑定書によっても証明された。機動隊のかス銃水平打ちによる頭がい骨陥没骨折による死の原理をおおひ隠し、斎藤鎮次郎や松倉とい

った御用学者の「支援の投言」による死という全くのデマフラメな「鑑定書」に依って、無理矢理言いつくろった露骨極まりない「決定」であった。これに対し、反対同盟農民と支援の労働人民は、増々、権力への怒りをつのりせ、30期港に権力機動隊を打ち破ることを実力阻止せんと立ち上がったのである。30期港の労働者、農民、学生、無防備な老人、子供、空港周囲四十数ヶ所には、一勢総攻撃の管制塔突入破壊によって、機動隊の陣中一撃を喰ひて死んでいく。30期港に機動隊を粉砕した闘いは、見事に、その事を示したといえる。これと同時に、3月28日、東山氏両親、反対同盟は、千葉地検・田村秀実検事正に対し、付審判請求書を提出し、決して権力の虐殺インパルを許さないと、民事・国家賠償請求訴訟と共に、裁判闘争に於ても、闘う姿勢を強めている。

我々は、東山薫氏家族、反対同盟農民、坂志岡田結小屋の仲間たちと共に、法廷に於ては、虐殺犯人を突き出し、権力の責任を追及し、法廷外では、大衆的にかつ実力で、

権力に報復し、いく闘いを担ってきたい。彼、それは、三里塚農民の中に深く入り、固く結びついて三里塚芝山連合空港反対同盟で闘おうと命を賭けた東山薫同志の遺志を我ものとして、「5・20期港」も実力阻止し、廃港へ追い込む闘いへの重大な決意でもある。

▼東山薫氏虐殺に到る経過と背景

昨年初頭の福田首相の「年内開港宣言」のもとで、政府空港は鉄塔破壊開港路の建設を遂行し、反対闘争へのけり、おりの弾圧を行って来た。反対同盟農民と労働者人民の団結は、急速に発展拡大し、4月17日には、二万三千名が、開港阻止ノ鉄塔防衛ノに向け、現地に総決起した。政府空港公団は、何よりも、反対闘争の拡大と全国の労働者、農民、反公害、反「国鉄」反基地などを叩く住民への影響を恐れ、「鉄塔が倒れれば、闘争は衰退し、空港への道が開ける」とマスコミを使うにキャンペーンの下で、5月6日の芝山連合空港打ち破壊を策動した。反対同盟をはじめ百万人共着者全く無視し、千葉地獄と謀議し、「5月2日鉄塔撤去仮処分申請」5月4日認可決定への何と書面だけの実質一日の超え、ピード登壇審理ノ一を一方的に通告し、それも、未明から数千人機動隊が周囲を遮断しにつて、「航空機法違反容疑」による現場検証」といつい実で、鉄塔に侵入し、防衛隊を暴行排除して、権力は、鉄塔を破壊し、略奪したのだ。これは、権力が、自ら、法を破るに暴挙であった。反対同盟は、千葉地獄に、仮処分決定に対する異議と執行停止を申し立てる一方で、8日緊急抗議集会を全国の人民に訴えた。

5月8日、三里塚現地千代田農協前広場に、鉄塔破壊に反対する数千人の労働者、学生、無防備な老人、子供、阻止線を作り、対人銃を乱射し、警棒、指を振りまわして、襲いかかり、多数の労働者、農民、学生、無防備な老人、子供に自傷を負わせ、逮捕しようとしたのである。それに対し、当然、実力で、弾圧を喰ひかえし反撃を加える闘いがいたる所で始まった。権力は、自らは掛けに戦闘に恐れおののき、「殺せ、殺せ」と所かすり、誰とも見向きなく、かス銃を水平撃ちにして、死者は人殺しを行って来た。これによって重傷を負った人々を介抱する臨時野戦病院へ斎藤さんの家内などで、その時、救護に当たっていた一人が坂志岡田結小

『権力による東山薫氏虐殺 糾弾の闘い』

▼はじめに

昨年、5月6日の鉄塔打ち破壊に続いて、8日東山薫氏が、権力機動隊のかス銃の弾に虐殺されて以来、すでに一手を迎えんとしている。三里塚芝山連合空港反対同盟農民、東山氏両親、坂志岡団結小屋の仲間たちが中心とな

権力に屈服し、いく闘いを担ってきた。彼、それは、三里塚農民の中に深く入り、固く結びついて三里塚空港反対同盟最後の闘いとなつて命を賭けた東山薫同志の遺志を我ものとして、「5・20開港」も実力阻止し、廃港へ迫り込む闘いへの重大な決意でもある。

▼東山薫氏虐殺に到る経過と背景

昨年初頭の福田首相の「年内開港宣言」のもとで、政府空港の闘いを鎮め、政府空港公団は、威信と延期に賭けて、空港を開港にするため、十数年に渡る三里塚農民の闘いとそれに結びついた労働者人民の闘いを向かへてもつづき、虐殺のインパルに備心して来た。その間、虐殺糾弾報復の闘いは「東山薫同志の遺志を受け継ぎ、空港を粉砕しよう」と、「3・30開港」阻止の闘いの重要な要素となってきた。権力千草連帯、地検当局は、そこで、3月20日、「3・30開港」阻止決戦の日、機動隊の士気を高め、「権力に立ちむかう者は、殺しても構はない」と激励すべく、虐殺した権力機動隊を不起訴処分にした。それは、千草大木村教授の解剖鑑定書によっても証明された。機動隊のかス銃水平打ちによる頭がい骨陥没骨折による死の自明をおおい隠し、斎藤銀次郎や松倉といふ御用学者の「支援の投石」による死という全くのデタラメな「鑑定書」に依って、無理矢理言いつくろった露骨極まりない「決定」であった。これに対し、反対同盟農民と支援の労農人民は、増々、権力への怒りをつのり、3・30開港しを権力機動隊を打ち破ることを実力阻止せんと立ち上がったのである。3・24日、2万人の労農衆が立ち上がり、空港周囲四十数ヶ所に、一勢総攻撃と管制塔突入破壊によって、機動隊の陣地を襲撃で突破して「30開港」運動を粉砕した闘いは、見事に、その事を示している。これと同時に、3月28日、東山氏両親、反対同盟は、千草地検・田村秀雄検事正に対し、付審判請求書を提出し、決して権力の虐殺インパルを許さないと、民事・国家賠償請求訴訟と共に、裁判闘争に於ても、闘う姿勢を強めている。

昨年初頭の福田首相の「年内開港宣言」のもとで、政府空港は鉄塔破壊用道路の建設を強行し、反対闘争へのけり、おのれ陣地を行って来た。反対同盟農民と労働者人民の団結は、急速に発展拡大し、4月17日には、2万3千名が、開港阻止／鉄塔防衛／に向け、現地に総決起した。政府空港公団は、何より、反対闘争の拡大と全国の労働者、農民、反公害、反「国鉄」反基地などを闘う住民への影響を恐れ、「鉄塔が倒れれば、闘争は衰退し、空港への道が開ける」とマスコミを使つたキャンペーンの下で、5月6日の芝山鉄塔打ち破壊を策動した。反対同盟をはじめ百万人共々有者全々無視し、千草地検と共謀し、「5月2日鉄塔撤去処分申請」5月4日認可決定と何と書面だけの実質一日の超スピード審判理（こ）を一方的に通告し、それも、未明から数千人機動隊と同調を煽断しにつえ、「航空機違反容疑」による現地検証」といつい実で、鉄塔に侵入し、防衛隊を暴行排除して、権力は、鉄塔を破壊し、略奪したのだ。これは、権力が、自ら、法を破るに基きであった。反対同盟は、千草地検に、仮処分決定に対する異議と執行停止を申し立てる一方で、8日緊急抗議集会を全国の人民に訴えた。

5月8日、三里塚現地千代田農協前広場に、鉄塔破壊に反対し、千草地検の「容疑」を糾弾し、権力機動隊は阻止線を作り、かス銃を乱射し、警棒、指を振りまわして、襲いかかり、多数の労働者、農民、学生、無防備な老人、子供に自傷を負わせ、逮捕しようとしたのである。それに対し、当然、実力で、陣地を固くし反撃を加える闘いがいたる所で始まった。権力は、自らは押しのけられ、恐ろしいとき、「殺せ」殺せと所かすり、誰とも目覚めなく、かス銃を水平撃ちにして、死者、人殺しを行って来た。これによって重傷を受けた人々を介抱する臨時野戦病院へ斎藤さん、家内、その時、救護に当たっていた一人が坂志岡団結小

屋の東山重氏であった。彼は、千葉真二機動隊が埼玉
県警機動隊と共に、この臨時野戦病院内に侵入しようとし
ていたのに対し、他の救護隊員と共にスクラムを組み、そ
れを阻止しようとした。(その時、彼はヘルメットもかぶ
らず、武器も持たず、全くの無防備だった。)

その時(午前十一時半ごろ)機動隊側が、放水を始め、
臨時野戦病院前路上の学生らが退避し、付近は空白にな
り、東山重氏をスクラムを組んだ。当時、同野戦病
院裏側から侵入してきた機動隊の隊員を見ようとした後方
を振り向いた所を、同野戦病院前路上にいた銃射隊
朱か左斜後方約5メートルの至近距離から、重氏の後頭
部付近にかつ弾を水平撃ちし、命中させた。彼は、瞬時
に、顔面を昏倒し、後頭部頭骨が骨折、開放性
脳損傷及び脳挫傷により、脳死状態に陥入り、5月10日
午後10時14分、成田赤十字病院において息をひきこった。

▼ 虐殺計画と権力の対峙の変化

権力による虐殺インパル、犯人のすり替えを許すは
5月13日、東山氏両親は、国警警庁長官浅沼、陸田愛
男、千葉県警本部警中村守男、山縣基夫、海野卓二、氏
名不詳警員(入カス銃射隊)と相争って、殺人罪と
特別公務員凌虐致死罪で告訴し、民事で国家賠償請求訴
訟も国、県を告訴した。反対同盟は西親と共に、告発
に起り上がった。反対同盟は「東山君を殺した警察権力
のほうよりした、しかも強固な意志をもって向けられた
筒先は、反対同盟の首領を射らったものであり、闘う人
民側は人への誘惑であり、最大の原因は結果を射らした
のです。」「私たちは、東山重君生誕の闘いを受け継ぐと
共に、彼が最も愛した土と農民を私たちの未来をかけて
守る闘いを続けていきます」と意志を述べている。

5月14日、反対同盟葬が行われ、直後は取手町の土
に埋葬された。5月29日、東山同志虐殺運動の鉄塔破壊
運動、曲居阻止の三里塚現地全国総決起集会に二万名
の労働人民が結集し、デモの後、取手町内諸小屋の窓と
共に生活し闘、この仲間を中心に、報復戦が闘、振か
れた。そして、告訴以来4ヶ月目を数え、千葉地検が、
「現在捜査中」としか応えず、握りつぶし不起訴訟
分業動を示していた8月28日「東山君虐殺糾弾」不起訴
処分業動糾弾の総決起集会が千葉市内で千四百名でか

ちこられた。そして翌9月29日から民事の公判闘争が始まっ
た。8月29日や一回公判闘争では、東山重氏の両親が口頭弁
論で親として虐殺の事実を明らかにしたいと意見表明し、弁
護団から訴状の陳述と、死因も新野が人弾によるものだとい
う千葉大木村教授の司法解剖鑑定書等の証拠の提出が行われ
た。それに対し、被告側、国、県側は、「死因は認められ
ないがかりにすぎない」と、因果関係に答えないとせ
ず、居直った。や二回の公判(10月31日)に於て、被告側側
は、「準備書面」を提出してきた。それは、虐殺の因果関係
等訴状に一切答えず、ただひたすら、東山重氏が「必要は取手
岡スル」のリーダーで「警察官に攻撃することと企図し」
ていたものとし、「臨時野戦病院」を「攻撃拠点」と決めつけ
、警察の「正当な警備」に「正当防衛」を印象づけようとしたも
ので、裁判の引き延ばしをねらったものだった。これに表れた
ものは、「過激派」や三里塚を闘う者は、いついかなる時で
も殺されて当然で、野戦病院の患者は全て「攻撃拠点」とい
くら侵してもよいという権力の論理であった。

しかし、や三回の公判(12月12日)では、被告権力は、当
初言い張っていた「正当防衛論」をあきらめ、「死因は、交
渉者の投石によるもの」という全くのデタラメな「答え」で
虐殺犯人を公然とするかえろ意図を明らかにしてきた。それは
権力か、時の経過で世論も薄く付いていると判断し、元来
このように、事実を半ば認めて居直り切れない事を自認して
全部ソソで固め、平行線を出せ切ろうとしてきたものである
。1月23日の第四回公判では、被告側からは「投石」説が
裏付けに「被告側」という御用記者の「鑑定書」が出され、原
告側は、「投石」説は説けるパターンをつぶすため、日英の証拠提
出と木村教授、スクラムを組んでいた人々など10名の証人を
申請した。そして3月24日や五回公判闘争を前に、そして又
何よりも、「3・30閉港」強行をねらった大津庄をめぐって、
3月20日、刑事の告訴に対する虐殺犯人の不起訴訟分を権力
一地域が、決定したものである。これに対し、地域に対する批
判闘争や、3月24日や三回公判に於ける糾弾から、「3・30閉港
に実効阻止の闘い、3月28日付裁判請求提出と反撃が、受け
継がれ、強化される」としている。

▼ 東山重氏との闘いの軌跡から深く学ぶ、我々の闘いの中
に教訓とし、権力に対し、生涯をかけた報復を貫徹しよう。

東山重氏の生活と闘いの歴史について(三三三)は
学び続けたい。

(終)

「法」を人民の手へ

法学部オリエンテーション実行委

全この学生諸君、とりわけ二の樹を放つ「古い学校」に入學して来た新入生諸君、専門領域「法」を通じて、絶えず自己にたいして自己の立場を検証しながら、その数に加わり、この二つの世界、熱き真実のメッセージと共に我々の見解を述べよう。

七〇年代法体系の全面再編攻撃は、このころ

その最終段階に入っている。

六五年日韓条約によって自由化した日本帝国主義は、朝鮮・

東南アジア侵略と東亞諸國体制に向けた国内再編と教育、抑鬱その他あらゆる分野において着々と押し進めている。とりわけ司法の領域においてこそ、警察・検察・自衛隊と官僚組織による専制支配に向けて、法運用、法解釈、法「改正」とありとあらゆる手段「血を流してこそ」「法治国家」を創出せんとしている。具体的には六〇年代後半からはじまる司法修習生の採用拒否、任官拒否、七〇年の宮本判事補の再任拒否等々の恫喝によって、体制に忠実な裁判官を育成することみうばじまった。「司法の反動化」等が叫ばれたように、最高裁の人事異動と専断官僚を通じて、裁判所を体制内に取り込むことが画策された。それは、七七年一度一年とみて、左衛門再審請求却下、三里塚鉄塔打ち破壊、東山君虐殺・殺人警官不起訴処分、狹山上校暴行、公務員多岐に対する一連の反動判決の固定化、最近のカネミ・スモ二等々々の国の責任回避、伊方原発訴訟住民側敗訴等に見られるように完成しつつある。更に七五年頃から司法研修所のカリキュラム強化や「修習生心得」による道徳教育、これは法律家に向かない。といった事が公然と教えられている。

刑事訴訟法一部改正特例法化を突破口とする、刑法改正

関連諸法規改正、弁護士会統制策動、非常時憲法「戒厳

令制定を許すはら

保守本流・福田は首相就任以来、二二五「刑法改正についで国民の意見を聞く会開催をはじめとして、三里塚・狹山への力の押しつけとみられるように、一気に関内再編を行おうとしてきた。こゝで田高、スダフ・フリーシヨコという帝國主義の未曾有の矛盾の激化、三三〇三里塚空軍用港果力阻止にみられる根強い抑鬱者人民の斗いという内外のゆがみにあえい

ている。こゝで核兵器に対する憲法解釈の変化、所轄論議、人権論議、四二八刑事訴訟法「改正」特例法化による弁護人抜き裁判、君が代の復活、皇國記念日祝賀政府後援にみられるように、天皇制を擁護すること、警察的・検察的・官僚的テロリズム専制支配への布石を着々と打っている。

人民の斗いに連帯し、分断攻撃に臨む。

反響を組織しよう

みかろ日本帝國主義の本質とその攻撃の本質とを把握しきれていない。修正主義者教者・社会非外主義差別者集団「日」「共」系民青団は、選挙や議会政治が人民を欺くための道具にすぎないという事を全く理解せず、スロリタリートの無層の誘惑をまねてしまっている。いまや「社会進歩」「社会への貢献」「社会の発展」とのフルジョフ社会の永続を願う諸君が、ズに陥落してしまっている。革命を志向する人民の戦士達の斗いに、フルジョフと一緒になり「暴力」「掃」を叫んでいる。自らを体制内左翼対派として安んずる道は、革命を否定してみせる事だと悟った日本は、国会内においてさえ、政府を攻撃するに及ぶ。あつた事が反社会主義者と連帯する人民の戦士たちにいわれるのは誹謗中傷、ナンセンスな「氷が融ける」を振り回している。

かつての日本共産党が地下で五一年綱領のもとで革命を志向していた五〇年代前半、破防法(2)、公安条例、自衛隊法制定、そして刑事訴訟法の大巾「改正」(3)が成された事でも明らかのように、「法」とは常に支配階級が人民と、そして人民の斗いを「犯罪」として罰し抑圧する為の道具として存在してきた。これららとそうである。

全この新入生諸君が台法、通法などといふフルジョフの幻想にまどわされる事なく、日本の攻撃の核心に向かつて反響を組織し、人事を強く訴えたいと思ふ。法を人民の手へ、共に斗おう

三里塚

—過去から未来へ—

資料3

五月六日鉄塔の抜き打ち破壊に対する反撃が五月八日緊急抗議集会を中心激しく行われ、その中で、東山薫氏が権力機動隊のガス弾の直撃で虐殺されるに致った。

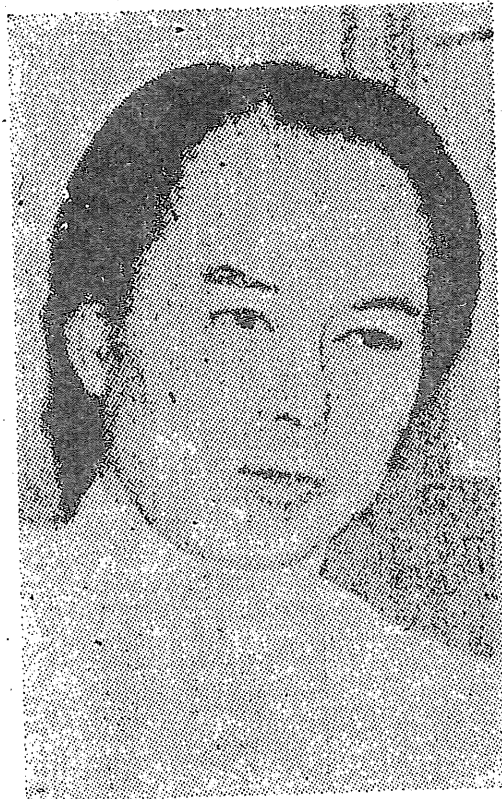
ここに掲載する農民運動家、三里塚芝山連合反対同盟の加瀬勉氏の講演は、五月一三日、京大に於て開かれた京都四・一七学生実行委員会主催の「東山薫同志虐殺弾劾」三里塚・日本原農民闘争に連帯する講演集会の中で行なわれたものである。

全国津々浦々の農民斗争の発展に献身してきた加瀬氏は、三里塚斗争を先頭とした日本の農民斗争として階級斗争の発展の現局面を分析している。さらに日本原、福島島をはじめ全国で反権力斗争として農民斗争が発展してきており、労働戦線と

の共闘の客観的条件も成熟してきている事を展開し、又、統一戦線、組織、部隊の問題において、鉄塔斗争や過去の斗いの中から教訓を引き出し、今後の方角を指し示している。

加瀬氏は、このような日本の階級斗争の根底に關わる大きな観点から斗いを進めることを提起して新しい局面に突入した三里塚斗争を斗っていくことを訴えている。

(一九七七年七月一日京大新聞より)



加瀬勉氏・農民運動家三里塚反対同盟員

はじめに

私の決意表明

三里塚反対同盟を代表致しまして、十一年間の歴史を持つ三里塚闘争に運命をかけて皆さん一人一人が決意を固めて共に闘ってこられたことに對して、敬意を表します。

三里塚闘争の十一年の歴史を振り返ってみますと、今また、東山薫氏が倒されました。小川明治さん大木よねさん、あるいは三宮藤男君と次々に権力に虐殺され、さらに國際空港のあのコンクリートの下に三里塚人民の道というものを葬ってしまったとする攻撃があります。そういう攻撃に對して、われわれは敢然と闘って参ったのです。

反対同盟は、明日十四日、東山君の追悼集会「反対同盟主催による人民葬」を行うわけであります。が、われわれは、三里塚のあの台地の赤い火山灰土が今、なお赤くなつたことを肝に命じながら、福田内閣なり、権力打倒のために、あるいは三里塚國際空港のためにより、更に決意を固めて前進をしていきたい。これが反対同盟の決意であります。

三里塚國際空港闘争において、あるいは十一年間の反対同盟の歴史におきまして、どんなに悲しいことがあっても、どんなにつらいことがあっても、どんなに犠牲を負つてこられても、階級斗争に休むことはありせん。十一年間の反対同盟の闘争に小休止はありせん。した。たは権力に對して進軍を開始する。その一点で闘ってきたわけでありました。この闘争の原則は普遍であります。さらに一層、全人民的な闘いを開始する。その第一歩に、本日の東山君の追悼集会がなりますように、私を含めて、決意を固めたいと思うのであります。私が皆さんの方から依頼されましたのは、農民問題という事になっておりまして、私も、三里塚を中心として農民運動をやつてまいりましたが、今日、農民運動という事でなく、三里塚闘争の現局面に、何としても自分自身の思想というものを鍛え抜いて、大木よねさん、東山薫君に負けないような思想性と組織性と行動というものを、いかにして自分の内外に担うかというところに必死になつておもうところであります。

そういうことで本来の講演の趣旨からですね、問題が外れること

になるかもしれませんが、今日のところは、反対同盟の二員である私の決意というところをお聞き願いたいと思います。

富里から

東峰十字路へ

ふりかへてみると、一九六〇年からの富里闘争の時代から、國際反対同盟に参加してゐるわけですが、國際反対同盟は十五年の歳月に忍びながら、なるわけですね。

その十五年前の時に、空港の地元の反対同盟の皆さんが、竹槍を作りまして、土地収奪に對して突力阻止するといふような準備をしたことがあります。

私はなぜ、このような準備をしたかと聞きたら、その富里の農民が、かつて小作争議の時に、地主の家のまわりを竹槍でデモ行進をした、その時、あんまり地主の犬が吠えるもので、犬の首をぶつたきつて、それを竹槍にさしてデモ行進をして、最後に地主の家の庭にその犬を投げた、ということだった。

われわれは、今度の國際反対同盟の決意は、そのような決意で行なうんです。

すでに十五年前、そのような決

意をして五千人の農民が蜂起した。その闘いは更に新しく引き継がれて、千葉原野を包圍して、県庁を包圍して、県庁のガラスをみんな粉々に割つて、県庁に乱入して、占拠するといふ闘争があつた。私もその一人として闘ひ抜いてきました。

日本の農民運動といふものが、不幸にも、昭和一九年あたりから反権力斗争として展開されてこなかつたわけですね。それは陳情闘争を通じて、米価闘争を中心として行なわれてきました。ところが独占資本の土地の激しい収奪に對して富里の農民は、初めて、反権力斗争として、県庁に乱入し占拠するといふ闘争をしたわけでありました。私はその原則というものを、三里塚闘争に実は引き継いでくるわけに決意を固めてあります。

ベトナム戦争が激しくなり、さらには、経済的にもアジアに日本帝國主義が侵出して、その見返りとしての「開發農業」、即ち「國際分業論」によつて外國の食糧が日本に入つてくる。それによつて日本の農業が破壊されていく。日本の農民が貧乏層になつて、さらに大資本に土地を奪われていく、といふ客観的情勢の中で、國際反対同盟といふものが起されて

くるわけがあります。

三里塚農民の最初の意識としては、あの機動隊のちやうどまじりまじりした投石(防護)用のネットを見ました時に、あれはスススを取るための網じゃないかと笑つておりました。そういう農民であつたが、十一年前の十月十日のあの外部測量阻止闘争には、機動隊と初めて白兵戦を演じたわけですね。私はずっとそういう事を見てきたわけですが、特に「三日戦争」を申し上げますが、それは、反対同盟の土地に機動隊や公団が立ち入り測量に来る時の闘争の事をいふのです。

その闘争の局面を申し上げれば、第四ゲートの中に反対同盟の土地があるわけですが、その土地を購入するために、機動隊と公団が土地に来るわけです。反対同盟の土地に初めて一本の杭が打たれるわけです。私はその杭の頭をつかんて引き抜いたのですが、そこに係員が来まして、そこで白兵戦が展開される。三日戦争の中で初めての白兵戦であつた。

岩山大鉄塔を守つていた反対同盟を中心とする支援部隊が、機動隊に對して、グソを一斗カンにして約七〇バイかけたわけです。いふいふ闘争を展開する時に、

機動隊が、反対同盟と支援団体を包囲したわけですが、そこで測量隊が測量のために入ってきたわけですが、そこへ、先発隊と支援団体が一列に竹槍を持って横から突入した。きれいに五人をセンメツしたわけだ。

たぐさんの人が「竹は竹じゃ、青竹ではだめじゃ、あらあ、機動隊の頭や公団の頭にはつばなすとバラバラになつてしまつ」と「だから今度は、コン棒でも何でもやらなきゃだめだ」と言つてもありませんでした。潮死の重傷を負つて倒れた、倒れている公団の野郎の心臓の上に、竹槍を垂直に立てて、さうして、でもさうしてはできなかった、でもあの時にさしてれば、まっすくに心臓になつていただろう」と言つても……。

またある人は「逃げていって、さうして後から竹槍で刺したら、金玉のうちの二つにささつた」と。残念ながらその公団の若い職員は金玉がつかなくなくなったわけだ。

こいつの激戦が展開された。

三里塚闘争においては、権力であれ、我々であれ、命をかけた階級闘争が展開されている。

反対同盟の歴史の中で、あらゆ

る「三里塚の農民があの土地に住み、あの土地を耕し、生活が出来る権利を要求する」と、福島県の農民も、この土地に住み、干拓を続けて、稲作が出来るという原則をたてたわけだ。

これに対して、国の農政局を中心とする権力が機動隊を導入して青田刈りを行なうという局面になった時に、新潟の県評を中心とする労働者が、延べ二百人くらい動員されて、農民と結合することによって稲の収穫を行なう。今年には農民の二千人が土地の配分の仮停止という権力の強行手段を受けただけですが、百何人かの人がすでに田を深耕して、田植の準備をしている最中です。労働者と農民が生産の問題でそのように団結することが、日本の津々浦々で行なわれているわけだ。

この間も、県評と反対同盟の幹部が北海道へ参りました。みなさん御存知のように、あそこは伊達の大火力発電所の闘争があり、石油ショック以来いまだに燃料の確保の見通ができていない。日本の帝国主義、あるいはその政治経済がこのような大きな矛盾を呈している時代であります。あらゆ分野においてでもう一つあります。

る武器をもって権力に立ち向かうという原則が確立されたのはこの時である。それを反対同盟はずっと堅持してきた。第一次第二次執行闘争、九・一六東峰十字路闘争……と引きつがれてあるわけだ。

発展する

農民闘争

農民運動が三里塚で様々な発展して行く時に、日本の各地でだんだん、農民運動としての実力闘争が展開されてきた。

米価闘争については、全日本農民組合を中心とした日和見主義の農民運動を例にあげれば、農林省に行つて一万五千円から二万円にあげるように等米価審議会に陳情闘争を行なつていたわけだ。が、その農民運動が現段階になると、どう発展してきたかといつと農民が政府に売り渡した米の価格が安過ぎるとして、農協の倉庫の政府米を阻止する。これを農民運動では出庫阻止闘争といひます。さらに、越後の先進的農民は出荷拒否闘争、すなわち、政府に米を売り渡さない、こいつの闘争を

苦言

労働者組合へ

私はこゝで話を三里塚にもつていたいと思ひますが、三里塚闘争を農民運動の側面から申上げてみると、私は労働者に対して、次のような要求をしてみたい。

——日本の労働者階級は日本の国を解放する革命の主要な勢力である。それが三里塚闘争に参加できないといふのは、いついかなのか。単に三里塚にきて集会に参加するとか、あるいは闘いを一日援助する事ではなくて、日本の労働者は革命の主力勢力である、農民を中心とするあらゆる人民の諸階級に対して、革命的な意識を提えるといふことが、歴史的な労働者階級の任務である。この観点といふものが、高度経済成長政策の中で労働者の中で空洞化しているといふことが、三里塚十一年の闘いの歴史の中でよくわかる。と苦言を申上げたわけだ。

これはどういふことかと申しますと、三里塚農民が労働者階級に期待して参りましたのは、もちろんカンパもあるでしょう、鉄塔闘争への動員もあるでしょう、あるいは集会への参加といふこともあつた。労働者といふこともあ

二年連続して闘った。これは、農民の言葉で言えば、労働者階級のストライキ闘争に学んで農民闘争を展開させるんだ、という事が、新潟県や山形、宮城など東北を中心として闘争が展開される。

昨年度の闘争では、新潟県の東蒲原を中心とした農民が二万五千人にわたつて、農協の倉庫前でスクラムを組んで政府米の出庫阻止闘争を行なつた。

こいつの運動が実は労働運動にどういふ影響を及ぼすかといひますと——

まず、この政府米を管理しているのが農協であります。農協の労働組合、つまり農協労働者の協力がなければ倉庫の鍵は、農協の担当者によって開けられてしまつたのです。ですから、農民と農協労働者の団結がここに新しく生れてくるという状態になる。

さらに、この政府米をここに運搬し、どのように処理するかという問題のオーナーを組むのは全農林労働組合連合、すなわち、食糧検査事務所労働者であります。ですから、このオーナーの組み方を拒否できる、と全農林労働組合連合に農民が共闘を申し入れる。

さらに、この政府の農協の倉庫から政府米をトラックで運搬する

のは日通であります。すなわち、日通の労働組合の問題がこゝで出てくる。ですから、米を運搬する日通の労働者、また、倉庫の管理をする農協の労働組合、あるいは全農林労働組合、とそれから農民これが一体となって実力闘争を展開されるという客観的情勢が実は日本の農民闘争の中で三里塚闘争を先兵として、発展してきたのが現在の局面であります。

しかし政府の方は、米の問題については、「生産調整」とか「減反」とか、すなわち米はこのぐらしか作つてはいかん、あるいは品種につきましても、コシヒカリとかササニシキとか自由米に適するうまい米をつくれといふことで、このような減反政策とか生産調整を行なつていふ。

それから皆さん、御承知のように、福島県の干拓闘争といふのが実力闘争として展開されている。農民運動における福島県の位置付けを見ますと——

福島県は西島といふ大きな地主の所有地だった。日本で最大の地主は山形県の庄内平野におります本間といふ地主であります。それは一番土地を所有していた時代には、一千七百町歩、空港の広さが一千六百町歩ありますから、それよりも大きい土地を本間が所有していたのです。

が所有していたのです。そして二千三百町歩の地主が西島あります。

その西島が所有していたのが福島県という沼で、広い土地であります。

そして、日本の農地解放に対して、地主を中心として、福島県では西島を中心として農地解放に対して徹底的に反対する。

それに対して農民が福島県の解放を叫んで今日に至るわけです。ところが、なかなか政府と旧地主が結託したので西島の持つていた福島県が、なかなか解放されない。昭和三年に、日本最後の農地解放として、福島県は解放されたのです。西島は解放の条件として、二千万の要求をした。

それに政府が応じなかった。そこで、二千万に対しての不足分を農民が七〇万を負担して、そういう形で解放に成功した。非常に不十分ではあるが成功したところから干拓といふものが始まつた。これは、米を作るといふ意味での闘争であります。ところが、政府は外国の食料を中心とする農業政策を進めておられますから、米を作らないといふことで畑作転換という要求をしてみたい。それに對して農民が「われわれには米を作る自由、農作物を作る自由があ

顔は

どろろに向へ

さらに、さういふ申し上げなら、十一年間、千葉県庁と運輸省に対する抗議活動と反対同盟は続けてまいりました。ところが中央委員会なり、県の空港対策課の職員のみならず、また自治労のみならず、いつもスクラムを組んで我々を阻止するわけです。ですからわれわれは「そこをどういふか。あんた方も自治労の組合員じゃないですか、労働組合員じゃないですか。だからそこをどういふか」と言つた。

ところが、いつも県庁に鍵をかけてわれわれを入れない。だから、われわれは県庁に乱入するわけです。乱入すると県の職員が、千葉の中央署や警視庁の刑事といつしよになつてわれわれの顔写真を撮るわけです。われわれはそれに断固抗議して、権力と一体となつてわれわれの写真を撮るとは何事か、と労働組合に行つたわけでありました。それが、今度は県庁に対して、建築物破壊あるいは侵入、あるいは公務執行妨害、こ

11.18 青年行動隊寺内主一氏来たる

三里塚の 不屈な闘魂

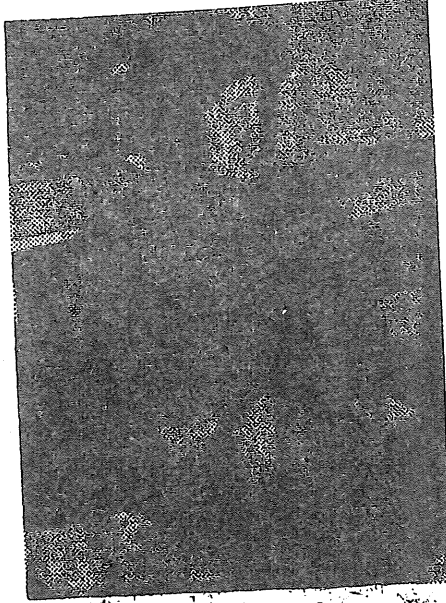
71東峰から77.4.17

寺内金一 ますますはじめる、「年度内開港」というマスコミを含めたキャンペーンがはじまっている。それに対して、我々の側からの問題提起を、京都大学新聞の中でやるという事を喜んでいきます。

まず話してきたいのは、我々反対同盟と青年行動隊が二年の闘いの中で考えてきたが、今それを追いついて話をしていきたい。第一番に我々としてみれば二年の闘いの中で、特に知ってほしいのは、七一年権力が行った第二次強制執行の中で東峰十字路開闢の「三警官の死」という問題を抜きには我々は考えられない。その「三警官の死」と、我々にかかれた青行つふし反対同盟つふしという強圧、青年行動隊全員逮捕という形の強圧、それ以降の第一次逮捕から、第十五次逮捕

なってきた。

そして、今集点となってきたのはジェット燃料輸送問題で新たに動労千葉地本が地本段階でジェット燃料をストライキで阻止するといふところからの攻撃がでてきているわけだし、そういうものと我々反対同盟の闘いが今後の権力の開港を我々の側から開港にするための闘いにつながっていく。(鉄塔破壊の問題については鉄塔破壊より以前、七一年終わりから民家の強制収容の中で、大木よねおさんなどの問題に関して言えば、公表してはならない法外な攻撃がある。その中で、スミナカを道で中止させ、スミナカを道で中止させ、それ以後突然それを破壊して、大木よねおさんが箱コキをやっている



寺内金一氏

があつて、一つの事件としては、法律的にも禁じられている、再逮捕、再々逮捕という、一人の人間を、三回までも逮捕するという攻撃をかけたが、現実的には、殺人罪ではなく傷害致死罪で起訴せざるを得なかった。その状況の中で、我々青年行動隊は、人間的にいけないけれども、殆どの人間が逮捕されて、起訴されている人間が三十五人いて、その他の事件を含めると三〇人以上が起訴されて裁判をうっているという我々の中の現状がある。それを踏まえて、また今、政府・公団がマスコミをやっているような開港キャンペーンの中で我々の二年の闘いの中で、違つた意味での三里塚の闘いの発展性が出てきている。我々が何をやらせて、権力が我々をどういう形でつふしにかかっていたか、それは我々が力強く闘ったからこそである。この問題で、我々の三里塚の中の闘いと全国の闘いのつながりがより多くを結んできた。

時に、警察権力を持ってきて強制収容をやつてきたという攻撃もあったし、だから、鉄塔破壊は、ある意味では当然ありうるんじゃないかと思つてた。彼らがやろうとしていたことは、現地にあればわかることだ。そういう意味では、精神的には、暴虐を行使していく権力のやり方が、鉄塔の問題よりも問題であつて、鉄塔の問題は反対同盟に言わせれば「物」としては過ぎたものはいずれ壊される」とか「三里塚の運動のシンボル」としてそれ程よく六年もつている」という問題であつて、人の死の問題ではない。人の死をもつてまでもやるといふ公団権力に対しての憎しみが鉄塔以上になつてきて、我々反対同盟、青行の中にも、権力のやり方に対しての憤

がかわらず逮捕して、水俣と三里塚の連帯を標榜しようとする策動の問題とかがあつた。或いは今年から始つた全国に我々が呼びかけた鉄塔共有化という形で運動を進めた中で、空港公団が空港の延長上にあるから、違法物件だとして、仮処分を申請する段階の第一歩として、二月に行われた鉄塔撤去用道路建設阻止の闘いがあつた。その闘いの中で、現地に集つた人々に対して、朝のうちに機動隊を配置して、七〇数名以上逮捕者を出して、破壊的攻撃をかけた。その問題を含めて、福田が年度内開港の大ラッパを吹いた後の問題として、我々の側から、今までの運動を皆に知らせる、より多くの戦線に駆けよつていふ事で、同盟の中からも、色々な地域に出かけて行つて、地域での交流会とか、運動の中へ入つて行つた交流などもするし、そして共に訴えてきた。

新たな闘いの シンボル建てる

農民としての闘い全国に

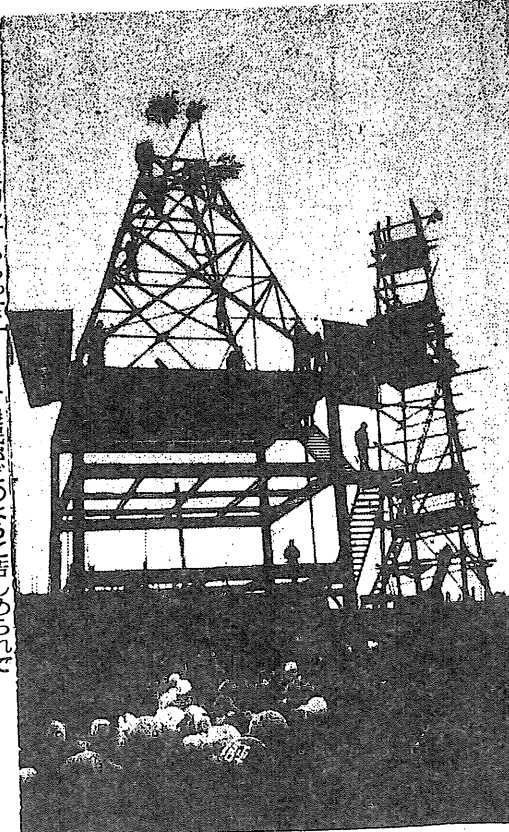
り、鉄塔自身へのそれはあつて、でも、中から、暴虐的強圧の闘いを進める中において、我々反対同盟は、鉄塔にかかわるものを現地にすべ、できるという自信はある。

ビルで二万数千人以上の人が集つてきた。これ程人が集つたという集会は、二年の闘いの中でない、それらの人が、どういふ實をもつた集り方をするか。それはやはり、三里塚で実力闘争をやつてきて、権力に対する実力闘争があつたからこそ集る。集る人間は、ただ集会に行つて、デモして帰るだけの意識じゃない。

鉄塔破壊から 暴虐殺へ

闘争の波及と集る権力

か百間の警備で我々も、我々に對して何の説明もなく、一方的に警察権力を使って、岩山の鉄塔を破壊してきた。そのものを壊して我々自身も、空港公団がずっと以前から、権力側つては、我々をだましてまじやつてきたわけだし精神的には岩山の鉄塔が倒されたといふあるダメージはあつたが、肉体的には彼らによって傷めつけられてない状況が生れたからこそ五・六以降、三日間の大衆的抗議集会和空港公団に対する弾劾集会ができたのではない。



か。これは皆に援助してもらつて共にやりたい。

今までのいろいろ話してきたけど、我々の二年の闘いの中で、結果的に局面局面に於いては、警察権力に負けた事はあつたが、三里塚とそれ以外の地域で闘う者のつながりがより多く発展してきて、だから権力もつかつては得意な、我々としては農民の闘いである。我々も、何か三里塚の地に突出して「三里塚の闘い」ではないんだって事をみんなにわかつて欲しい。僕は現実に百姓やうつていて、百姓といふものも土つてものに對しても我々の側から闘いかけてきた。

